高校在学中の性交経験の有無による親子関係の質的違い

五十嵐　哲　也

問題

本研究は，高校在学中の性行動やそれに対する規範意識が，当時の親子関係の質的違いによって，どのように異なるのかを明らかにすることを目的とする。

近年，主に高校生の性交経験率の急激な増加が指摘されており，こうした事態に対する援助がスクールカウンセリングにおいても急務であると主張され始めた(e.g.,宮本ら,2002)。加えて，『援助交際』などの性的逸脱行動も社会問題化して久しい。『援助交際』に関する最近の研究では，櫻庭ら(2001)が，女子高校生における『援助交際』に対する抵抗感は，流行同調，ぬくもり希求，金銭至上主義，関心の狭さといった現代青年に特徴的な心性によって弱められるということを実証している。また，磯網・藤生(1999)や東京都幼稚園・小・中・高・心障性教育研究会(2002)，日本性教育協会(2001)などの指摘を踏まえても，現在の思春期・青年期における性行動の活発化や性的逸脱行動の増加の背景には，多くの要因が複雑に関与していると考えられる。

そうした背景として考えられる要因の中でも，とりわけ対人関係の問題は重要である。性行動は対人関係の中で形成される行動の一つであり，直接的には親しい同性友人などの関係性を基礎に，心身の発達に伴って生起するものであると指摘されている(Sullivan, 1954)。これを受けて五十嵐・庄司(2003)および五十嵐(2003)は，今まで実証的な検討を加えられることが少なかった高校時の友人関係と性行動との関連性を明らかにし，男性は安定した友人関係を背景として，対人関係の発達に伴って性交経験に至る可能性が高いけれども，女性の性交経験者は未経験者よりも友人に対する信頼感が少なく，親密度も低いことを指摘している。

一方で，先にあげた櫻庭ら(2001)は，『援助交際』の抵抗感と親への肯定的感情との関連を指摘している。すなわち，『援助交際』に対する抵抗が強い女子高校生は，『援助交際』を経験した女子高校生，および『援助交際』に対する抵抗が弱い女子高校生に比べて親に対して肯定的感情が高く，そうした肯定的感情は『援助交際』に対する抵抗感を強める影響をもたらすことが実証されている。このような関連性は，逸脱的とは断定できない性行動との間にも認められるのではないかと考えられる。したがって，この点に関するより詳細な検討を行なうことが必要である。

では，これまでに性行動と親子関係の関連性はどのような点が明らかにされてきたのだろうか。戸田・松井(1985)は，大学生の愛着構造と異性交際との関連について検討し，男性ではその関連が見られないが，女性では性行動の進んでいる者ほど母親への愛着が低いということを示している。また，薙野・上田・宮崎(1991)は，親の態度を厳しいと感じている高校生は，性情報を自宅外で友人から得る傾向にあることを示している。阪西・斎藤・川越・広井(1987)は，親子間で性に関する話題を話すと回答した高校生の親は半数を超えるものの，親が是認する性行動の経験と，高校生が実際に経験している性行動との間には大きなギャップがあることを明らかにしている。和田・西田(1992)は，大学生を対象にし，女性の性的寛容さは母の性に対する自由な考え方や家庭での会話の程度によって規定されるが，男性は父母の性に対する自由な考え方，家庭の経済的状況，親の成績重視度によって規定されることを明らかにしている。石橋・石川・月村・里見(1997)はデートクラブに出入りする少女に調査し，性交経験の有無による家族観の比較を行なっている。その結果，性交未経験者は経験者に比べ，より強く「親が厳しすぎる」「親が細かく口を出す」と感じていた。堀・福富・川上・山本・吉田・川田・月村・松井(1982)は，親の養育態度を受容－拒否，放任－干渉の2軸によって4タイプ(無視型，独裁型，甘やかし型，溺愛型)に分類し，男女とも独裁型の母親ではキス経験率が高くなり，溺愛型でもやや高くなることを明らかにした。Jeffrey(1998)は，親の教育水準が，20代の若者の知り合ってすぐの性交や性交経験の相手の数と関連があることを示している。

このように，親の養育が厳しければ性行動そのものは生起しにくいとも考えられるが，かえって親の関知

できない状況で性情報と接触し，結果的に親が予測するよりもはるかに多くの者が性交を経験するに至っているとも考えられる。しかし，これまでの研究では，親の養育に関する質的な諸側面が性交経験の有無によってどのように異なるのか，という点については明らかとなっていない。そこで，本研究ではこの点に関し，さらに「親がどのくらいの年齢になれば性交を経験してもかまわないと考えているだろうか」という認知と，「自分はどのくらいの年齢になれば性交を経験してもかまわないと考えているか」という意識をあわせて検討し，質的な検討も含めて詳細に明らかにしていく。

［研究Ⅰ］

1．目的

高校在学中の性交経験や性行動に関する規範意識と，当時の親子関係および親が期待する性行動に関する規範意識との関連を検討する。

2．方法

1）調査対象

本研究の目的を踏まえれば，高校生に対する調査が必要である。しかし，本研究では性交経験の有無を尋ねる項目が必要であるため，高校生の負担になることが予測された。また，性交経験の有無についての項目に対する回答結果の信頼性を考慮すれば，現時点よりも過去の事実を尋ねる方が，より客観的な結果を得られると考えた。

そこで，本研究では回想法を用いることとし，A県内にある男女ほぼ同数の国立大学，B県内にある女子が多い私立大学，C県内にある男子が多い私立大学，計3つの大学に在籍する大学生401名（男子211名，女子190名）を対象とした。対象者の平均年齢は，男子20.15歳，女子19.61歳であった。

2）調査内容

フェイスシートで学年，性別，年齢を回答してもらった後，以下の項目について尋ねた。なお，(a)(b)については「あなたが高校生だった頃」と教示し，回想法による回答を求めた。

(a)　高校時の親子関係

高校生の時の親子関係を測定するために，親子関係診断尺度EICA（辻岡・山本，1976）を用いた。下位尺度は「統制」「同一化」「自律性」「情緒的支持」であり，各10項目，計40項目であった。辻岡・山本（1976）にしたがって項目を分類し，父親，母親それぞれについて各項目得点の総和を下位尺度得点とした。「非常にあてはまる」～「全くあてはまらない」の6件法とした。

(b)　高校時の性交経験に関する規範

卜部・大木・百瀬（1996）を参考に作成した。どのくらいの年齢になれば，自分自身が「性交（セックス）を経験してもよい」と考えていたかを問うもので，あてはまる年齢を一つだけ具体的な数字で記入してもらった。これによって，より低い年齢を回答した者の規範意識は低く，より高い年齢を回答した者の規範意識は高いことをあらわすと考えられる。

その際，自分自身はどのように考えていたか（自分自身の規範）のほかに，父親はどのように考えていたと思うか（父からの期待），母親はどのように考えていたと思うか（母からの期待）についても回答してもらった。

(c)　これまでの性交経験について

これまでに性交を行なったことがあるか否かについて尋ねた上で，性交経験があると回答した者に対し，初めての性交経験の年齢を記入してもらった。また，初めての性交経験が高校卒業より前であった者については，高校在学中の人数についても記入してもらった。その結果，高校在学中に性交を経験した男子は110名（52.1%），未経験者は78名（37.0%），無回答が23名（10.9%）であった。女子では，54名（28.4%）が高校在学中に性交を経験しており，高校時性交未経験群は117名（61.6%），無回答が19名（10.0%）であった。

3）調査手続

2003年10月中旬～12月中旬に，授業時間の一部を用いて無記名の調査用紙を一斉に配布し，回答，回収された。一部の対象者については，自宅へ持ち帰り後に回答，回収された。配布に際しては，密封可能な封筒に調査用紙を入れて対象者に渡した。また，回収に際しては，その封筒に回答済みの調査用紙を入れ，密封して調査実施者に渡すよう教示した。回答については，他の人とできるだけ離れて座りなおした上で，話をせずに回答するよう教示した。さらに，答えたくない質問には答えなくてよいこと，結果は研究以外の目的に使用しないこと，プライバシーは厳重に保護されることが確認された。

3．結果

分析に先立ち，対象者の中から，性交経験の有無と初めて経験した年齢，および高校在学中の経験人数によって，高校在学中に性交経験がある者を抽出した。

また同様に，調査時点までに性交経験がない者と高校卒業後に性交経験がある者を，高校在学中に性交経験がない者として抽出した。なお，高校在学中の性交経験については，経験人数が複数か否かによって，経験者をさらに分類した。

1）性交経験の有無による親子関係の質的違い

まず，高校在学中の性交経験の有無によって，当時の親子関係に質的な違いが見られるかを検討するために，性と性交経験の有無を要因とする2要因分散分析を行なった(Table 1)。

その結果，父親については交互作用が認められなかった。性に関する主効果は，「自律性」「情緒的支持」において認められ，いずれも男性の得点が有意に高かった。性交経験の有無による主効果は，「情緒的支持」において認められたが，Tukey法による多重比較の結果では有意な結果が見られなかった。

母親については，「同一化」において交互作用が認められた。単純主効果の検定を行なったところ，性では複数人との経験者において有意であった($p<.05$)。性交経験の有無では女性において有意であり($p<.05$)，複数人との経験者の得点が最も低かった。また，性に関する主効果は「自律性」において認められ，男性の得点が高かった。性交経験の有無による主効果は，「同一化」「自律性」「情緒的支持」において認められたが，Tukey法による多重比較の結果では，「同一化」「自律性」で有意な結果が見られなかった。「情緒的支持」では，複数人との経験者の得点が最も低かった。

2）性交経験の有無による，性行動に関して父母から期待される規範意識の違い

次に，高校在学中の性交経験の有無によって，当時に父母から期待されていたと感じる，性行動に関する規範意識に差があるかを検討するために，性と性交経験の有無を要因とする2要因分散分析を行なった(Table 2)。

その結果，交互作用および性交経験の有無による主効果は認められなかった。性に関する主効果はいずれにおいても認められ，男性の方が，より低い年齢でも経験してもかまわないという期待を受けていると感じていた。

Table 1　性および高校時性交経験の有無による親子関係の差

				統制		同一化		自律性		情緒的支持	
男性	未経験者	(n=76)	父	2.67	(0.80)	2.95	(0.91)	4.06	(0.92)	3.97	(0.96)
			母	2.81	(0.82)	3.23	(0.89)	3.98	(0.93)	4.19	(0.86)
	一人のみ経験者	(n=48)	父	2.55	(0.63)	3.04	(0.76)	3.94	(0.94)	4.00	(0.87)
			母	2.58	(0.58)	3.27	(0.74)	3.83	(0.84)	4.25	(0.80)
	複数人との経験者	(n=61)	父	2.72	(0.85)	3.01	(0.92)	3.93	(1.00)	3.83	(1.01)
			母	2.75	(0.80)	3.24	(0.94)	3.81	(0.98)	4.03	(0.97)
女性	未経験者	(n=117)	父	2.59	(0.85)	3.11	(0.83)	3.90	(0.89)	3.69	(1.08)
			母	2.82	(0.85)	3.33	(0.83)	3.78	(0.86)	4.19	(0.94)
	一人のみ経験者	(n=31)	父	2.38	(0.62)	3.15	(0.85)	3.59	(1.02)	3.77	(1.26)
			母	2.91	(0.77)	3.54	(0.85)	3.38	(0.92)	4.32	(1.14)
	複数人との経験者	(n=23)	父	2.54	(1.05)	2.67	(0.87)	3.79	(1.06)	3.08	(1.23)
			母	2.84	(0.97)	2.83	(0.96)	3.64	(0.91)	3.67	(1.09)
主効果	性	F 値	父	2.00		.05		3.59	†	10.95	**
			母	2.20		.02		6.03	*	.72	
	性交経験	F 値	父	1.23		1.73		1.48		3.83	*
			母	.23		3.36	*	2.75	†	4.40	*
交互作用		F 値	父	.15		2.20		.29		1.41	
			母	1.07		3.18	*	.62		1.14	

(　) 内標準偏差　　† $p<.10$　* $p<.05$　** $p<.01$

Table 2　性および高校時性交経験の有無による父からの期待，母からの期待の差

			父の期待		母の期待	
男性	未経験者	(n=65)	20.28	(2.55)	20.51	(2.87)
	一人のみ経験者	(n=44)	20.61	(5.91)	20.73	(5.79)
	複数人との経験者	(n=54)	19.13	(2.01)	19.08	(1.97)
女性	未経験者	(n=99)	21.49	(2.66)	20.84	(2.44)
	一人のみ経験者	(n=28)	21.46	(2.38)	21.34	(2.21)
	複数人との経験者	(n=18)	20.92	(2.22)	20.86	(2.41)
主効果	性	F 値	9.25	**	4.75	*
	性交経験	F 値	1.83		1.76	
交互作用		F 値	.33		1.06	

(　) 内標準偏差　　* $p<.05$　** $p<.01$

3）親子関係，父母からの期待，自分自身の規範の関連：性交経験の有無別の検討

親子関係の質的な諸側面と，性行動に関して父母から期待されていた規範意識，および自分自身が抱いていた規範意識との関連を検討するために，性交経験の有無別に Pearson の積率相関係数を算出した。

その結果，未経験者(Table 3)や1人のみ経験者(Table 4)では，弱程度ながら，父母の「自律性」と，父母からの期待および自分自身の規範との間に負の相関関係もしくは相関傾向が認められた。また，父母からの期待と自分自身の規範との間には，中～強程度の正の相関があった。

しかし，複数人との経験者(Table 5)では，いずれも弱程度ではあるが，父からの期待には，父母の「情緒的支持」や母の「同一化」との間に負の相関関係があることが示された。また，母からの期待では，父母の「同一化」や父の「情緒的支持」との間に負の相関関係もしくは相関傾向があることが示された。また，父母間の期待は相関関係が認められるが，それらは自分自身の規範とは関連がないことが明らかとなった。

4）父母間の親子関係についての質的一致度の違いによる，父母からの期待および自分自身の規範の差

父母それぞれについて，親子関係の下位尺度ごとに

Table 3　未経験者の相関分析結果

	父親からの期待	母親からの期待	自分自身の規範
父・統制	−.03	.08	−.05
父・同一化	−.01	.05	−.02
父・自律性	−.21 **	−.24 **	−.18 *
父・情緒的支持	−.15 **	−.02	.01
母・統制	.04	.09	−.02
母・同一化	.01	.01	−.10
母・自律性	−.26 ***	−.25 ***	−.22 **
母・情緒的支持	−.12	−.06	−.01
父親からの期待	—	.84 ***	.40 ***
母親からの期待	—	—	.45 ***

* $p<.05$　** $p<.01$　*** $p<.001$

Table 4　1人のみ経験者の相関分析結果

	父親からの期待	母親からの期待	自分自身の規範
父・統制	.12	.09	−.05
父・同一化	.02	−.04	.13
父・自律性	−.31 **	−.28 *	−.21 †
父・情緒的支持	−.04	−.08	.07
母・統制	.19	.24 *	.07
母・同一化	−.02	−.01	.08
母・自律性	−.27 *	−.29 *	−.19 †
母・情緒的支持	−.07	−.10	−.15
父親からの期待	—	.96 ***	.44 ***
母親からの期待	—	—	.42 ***

† $p<.10$　* $p<.05$　** $p<.01$　*** $p<.001$

Table 5　複数人との経験者の相関分析結果

	父親からの期待	母親からの期待	自分自身の規範
父・統制	.02	−.12	.06
父・同一化	−.18	−.20 †	.05
父・自律性	−.18	−.09	−.11
父・情緒的支持	−.31 **	−.25 *	−.14
母・統制	.02	−.10	−.03
母・同一化	−.02 **	−.30 **	−.06
母・自律性	−.27	−.09	−.03
母・情緒的支持	−.07 *	−.16	−.11
父親からの期待	—	.77 ***	.19
母親からの期待	—	—	.16

† $p<.10$　* $p<.05$　** $p<.01$　*** $p<.001$

平均値を算出した。そして，それを基準に対象者を高低群分けし，父H母H群，父L母H群，父H母L群，父L母L群の4群にさらに群分けした。

そこで，父母からの期待および自分自身の規範について，その群分けと性を要因とする2要因分散分析を行なった。

その結果，父母の「同一化」高低群分けの結果については，自分自身の規範について交互作用が認められた(Table 6)。単純主効果の検定を行なったところ，性別では全ての群において有意であり($p<.05$)，父H母L群では女性，それ以外では男性の規範が低かった。「同一化」高低群では，男性で有意であり($p<.05$)，父H母L群の規範が最も高かった。

その他の下位尺度の高低群分けによる分析結果では，交互作用が認められなかった。しかし，父母の「自律性」高低群分けによる分析では，父からの期待($F[3/323]=3.43, p<.05$)および母からの期待($F[3/323]=3.94, p<.01$)において，「自律性」高低群の主効果が認められた。Tukey法による多重比較の結果，いずれも父H母H群が父L母L群に比べ得点が低いことが示された($p<.01$)。

4．考察

研究Iでは，高校在学中の性交経験や性行動に関する規範意識と，当時の親子関係および親が期待する性行動に関する規範意識との関連を検討することを目的とした。大学生を対象としているため，現在の高校生の状況を的確に反映しているとは言えないが，以下のことが示唆されるであろう。

まず，男性と女性では親子関係が異なり，男性の方がより自律的な養育がなされていたと感じていた。これには，両親や自身の性役割意識が大きな影響を与えているものと考えられる。また，そうした親の養育に対する子の認知は，父母間でも異なることが明らかとなった。すなわち，父親が情緒的な支えになっていると強く感じているのは男性であるが，母親については性差がなかった。Table 1を見ると，概して母親の「情

Table 6　父母の「同一化」の高低群分けによる父からの期待，母からの期待，自分自身の規範の差

			父からの期待		母からの期待		自分自身の規範	
男性	父H母H	(n=72)	19.82	(3.24)	20.08	(3.44)	16.99	(1.85)
	父L母H	(n=19)	19.11	(3.14)	19.05	(3.19)	16.11	(1.49)
	父H母L	(n=15)	20.47	(2.33)	20.13	(2.03)	19.07	(1.94)
	父L母L	(n=69)	20.25	(4.23)	20.30	(4.21)	16.99	(2.15)
女性	父H母H	(n=56)	20.96	(2.11)	20.69	(2.18)	17.72	(1.67)
	父L母H	(n=21)	22.02	(3.05)	21.62	(1.98)	17.81	(1.78)
	父H母L	(n=22)	22.27	(2.14)	20.95	(1.96)	17.73	(1.78)
	父L母L	(n=50)	21.44	(2.78)	21.10	(2.83)	18.46	(2.41)
主効果	性別	F値	18.09	***	8.42	**	6.15	*
	「同一化」高低	F値	1.06		.25		4.13	**
交互作用		F値	.93		1.04		5.33	*

(　) 内標準偏差　　* $p<.05$　** $p<.01$　*** $p<.001$

緒的支持」得点は高いと言えるので，母親は子の性別によって情緒的な支えを与える程度を変化させることはなく，子も性別によって受け取り方が異なることもないと言える。一方，父親は子の性別によって態度を変化させることや，子も性別によって異なった受け取り方をすると推測される。したがって，本研究の結果については，親や子の性別によって既に関係性が異なっているということを踏まえておく必要がある。しかし，本研究と同様にEICAを用い，性差についても検討した小住・伊藤・織田(2000)では，逆に女子の母親における「情緒的支持」得点が高いという結果が得られている。小住・伊藤・織田(2000)は中学生を対象としているため，発達的変化の影響を受けている可能性があるが，詳細な検討を行なう必要があろう。

また，高校在学中の性交経験の有無によっては，母親の「同一化」において，女子の複数人との経験者の得点が最も低いという結果が得られた。「同一化」の構成項目は,「私が大きくなって家の外で過ごす時間が増えてきたことを残念がっているようだ」「私を喜ばそうとしていろいろなことをする」などであり，発達段階や心理的状態によって子はそれを疎ましく感じることもあるかもしれないが，基本的には親からの肯定的感情が背景にあると考えられる。実際，辻岡・山本(1978)によって，「情緒的支持」と「同一化」は関連が深いことが示されている。また，本研究でも，男女ともに複数人との経験者は，母親における「情緒的支持」得点も低いことが明らかとなった。堀ら(1982)では,「この家に生まれてイヤだと思うこと」が多い高校生ほど，積極的な性行動を行なっていることが明らかとなっている。本研究の結果はこれを支持するものであり，複数人との経験者は，親子間における肯定的感情の授受が良好ではなかったことが推察される。

さらに，性行動に関して父母から期待される規範意識については，男性の方がより低い年齢でも「性交を経験してかまわない」と両親ともに思っているのではないかと認知していたことが明らかとなった。これは，薙野・上田・宮崎(1991)が述べている,「親は女子の性に対して管理が厳しい」という指摘に一致している。しかし，性交経験の有無による差は認められなかったため，親からの期待が直接的に個人の性交経験に影響を及ぼすことはないとも考えられる。

しかし，本人が高校生の時に「どのくらいの年齢になれば性交を経験してもかまわないと思っていたか」という規範意識を含めて検討した結果,未経験者や1人のみ経験者では,父母から期待される年齢が高ければ，自分自身が思う年齢も高まるということが示された。したがって，性交を経験する前の段階では，こうした親からの期待が性交経験を抑制する要因となることが示唆される。また，特定の異性との間には性的な関係を形成している段階であっても，高校生活の間により多くの異性との間で複数回にわたる性交経験を繰り返すことを防ぐ要因として，親からの期待は作用する可能性があると言えよう。

一方，複数人との経験者では，親からの期待は自分自身の規範とは関連がなく，親子関係の質的な違いも自分自身の規範には全く関連が認められなかった。ただし，父からの期待には父母の「情緒的支持」や母の「同一化」が，母からの期待には父母の「同一化」や父の「情緒的支持」が，それぞれ負の相関を示していた。これらを考え合わせると，複数人との経験者は親を自身とは独立した存在としてみなしているとともに，親子間の情緒的交流が乏しいと感じていたのではないかと推察される。したがって，複数人との性交経験に至る背景には，親子間における親密さの欠如があるものと示唆される。これは，辻岡・山本(1978)が二次因子分析によって,「同一化」「情緒的支持」が「受容性」という二次因子を構成することを示していることからも示唆される。

また，父母間の親子関係の一致度との関連を検討したところ，まず，父母が一致して自律的な養育をしていたと感じている者において，性行動に関して父母から期待される規範意識が低かった。先にも，父母の「自律性」と，父母からの期待および自分自身の規範との間に負の相関関係もしくは相関傾向が認められていた。したがって，自律性を重視した養育は性行動に関する親からの期待の認知だけではなく，自身の規範意識をも低下させて，性交経験に至る可能性が示唆される。本来，自律的な養育は，子の自律性を高めるための働きかけであり，規範意識もそれに伴って高まるかと考えられる。しかし，本研究の結果は異なっていた。このことから，本研究で取り上げた「自律性」は，子にとって「厳しくない」という認知や，「統制力の弱さ」という認知を反映しているのではないかと推測される。これは，辻岡・山本(1978)が二次因子分析を行なった結果,「統制」「自律性」が「統制性」という二次因子を構成することを示していることからも示唆される。しかし，それは「統制」とは関連が見られないことから，単純に親が厳しくすることが性行動に関する規範意識を高める結果とはならないこともあわせて指摘できる。さらに,「同一化」に関しては，父H母L群の

場合にのみ，男性の自分自身の規範が高まるという結果が得られた。これは，男性に対する父親の影響力が強い状態であると考えられる。このような場合，男性は性交経験に至りにくいと考えられる。

以上を踏まえて，研究IIでは質的な調査を行い，詳細に親子関係と性行動との関連を検討する。

［研究II］

1．目的

高校在学中の性交経験者と未経験者では，当時の親子関係の認知がどのように異なるのかという点について，面接調査によって質的に検討する。

2．方法

1）調査対象

研究Iの調査実施時に面接協力を呼びかけた。そこで依頼に応じてくれた者のうち，実際に面接が実施されたのは11名(男性6名，女性5名)の大学生および大学院生であった。面接対象となった者の属性などについては，Table 7に示す。平均年齢は男性22.0歳，女性20.4歳であった。

2）調査内容

高校在学中の親子関係や現在までの性交経験の有無，高校在学中の性交経験の有無について，対象者の語りに沿って詳細な点を明らかに出来るよう，質問を行なった。面接では，他に当時の友人関係などについて質問を行なったが，ここでは主に親子関係について報告する。

Table 7　対象者の属性

対象者	性別	これまでの性交経験の有無	高校在学中の性交経験の有無	初めての性交経験の年齢
A	男	○	○	高校3年
B	男	○	○	高校2年
C	男	○	○	中学3年
D	女	○	○	不明
E	女	○	○	高校1年
F	男	○	×	大学1年
G	男	×	×	－
H	男	○	×	20歳
I	女	○	×	不明
J	女	×	×	－
K	女	○	×	大学1年

3）調査手続

2003年11月～12月に，面接室内にて行なわれ，実施時間は約1時間であった。テープ録音は，研究として公表することを前提に，対象者の許可を得て行なった。話したくないことは話さなくてよいこと，研究以外の目的には一切使用しないこと，個人が特定されるような情報は公表されないことが確認された。

面接は，1対1の半構造化面接によって，主に高校時代を回想してもらいながら行なわれた。面接の担当は筆者(男性)と教育臨床学の専門家1名(女性)の計2名であったが，どちらが担当するかについては対象者の希望(主に性別に関して)に則って決定された。

4）データの整理

面接によって得られたテープ記録を文字化し，それを資料とした。資料は，対象者ごとに，対象者の発言に対して通し番号をコーディングした。したがって，以下に対象者の発言に付与される数字はこの通し番号である。分析は，これらの質問内容とそれに対する回答内容から資料を分類し，行なわれた。

3．結果

1）高校在学中の親子関係

高校在学中の親子関係に関する発言例をTable 8に示す。

多くの対象者が，高校在学中の親は口うるさい存在であったと感じているほか，女性は父親と話をしなかったという発言が認められた。性交経験の有無によっては顕著な差が認められなかったが，男性では未経験者のほうがより「親が厳しい」と感じている傾向が見られた。対象者Fがそのような発言をしていないのは，Fが性交を経験した時期が大学入学直後であったことも関連していると考えられる。

2）性交経験後の親子関係の変化

高校在学中に性交を経験した対象者A～Eに対し，自らの性交経験後に親子関係で変化した面があるか尋ねた。

その結果，男性では，C[108]「あんまり，別に親にも言わなかったし，親も多分知らないし。なんにも思わなかったです。」というように，全員がその変化はなかったと感じていた。一方，女性は，D[35]「罪悪感みたいな。特に母親に対して。」，E[90]「高校生のときでやったって言ったら，お母さんもがっかりするかなって。」というように，母親に対する罪悪感を述べていた。

Table 8　親子関係に対する発言例

（　）内の発言は面接者によるもの

	高校在学中性交経験者		高校在学中性交未経験者
A 男 性	[65] 僕は基本的にお母さんと仲がいい。(略) [66] (お母さんとはどんなことで？)基本的に合いますよね。話が。お父さんも別に仲悪いとかじゃなくて。(略) [67] (性格的には？)どっちも明るいと思います。 [68] 特に不満はなかった。勉強しろとも言われなかったし。一般家庭で言いそうなことは言われたと思いますけど。	F 男 性	[46] (略)すごい穏やかで。自分の要望を何でも聞き入れてもらったというか，過剰に世話をしてもらった感じがありますね。(略) [54](お父さんとお母さんで違うところとかないですか？)違うところですか？うーん。母親が働き者で，父親が怠け者くらいですかね。(略)
B 男 性	[44]関係が悪いって事はなかったと思うんですけど。うちはわりと父が遅くまで出ていることが多くて。母がいちいちかまってくれてる感じなんですけど。口がうるさい。(略) [49] 父は，性格，そうですね。昭和の親父っぽいんでしょうかね。まあ，うちにいるとそこまでビクビクしてるわけじゃないんですけど。(略)まあ，普段は優しいですけど。(略) [50] 母は，柔らかなというか，近所づきあいもあるような。口うるさいのを除けばいい母だと思います。	G 男 性	[58] 母親はもともと厳しい，教育者なんで。(略)友達のうちの話を聞くと，うちは厳しいって。 [59] (お父さんは？)たいしたことないですね。うちは本当に母親だけでもってるうちなんで。父親はおまけです。たまに母親に尻を叩かれて，父親らしくしなさいよって言われてそれで僕たちに厳しく接するっていうぐらいですかね。 [71] やっぱり残念だけど親としては尊敬もできるけど，親みたいな家庭は作りたくないって思わせるような夫婦です。
C 男 性	[85] お母さん。勉強しろってうるさい。それくらいですかね。あんまり何も言われない。 [86] (お父さんは？)もっと何も言われない。 [90](何も言われない？)あー，なんて言うんだろう。何々しろとか，どうしろとか。 [91](命令とか，指示とか。)そう。それはあんまりない。早く帰ってこいとかっていうのも，そんななかったです。 [92] (わりと自由に)そう。自分の好きにやれみたいな。	H 男 性	[53] あー，父親はですね，厳しいですね，厳しかったですね，正確に言うと。今はもうだいぶ丸くなった気がします。[54] (略)筋が通らないことに関しては厳しいですね。(略) [56] (お母様とお父様と違うところは？)えっと，感情的なのは母親ですね。積極的なのは母親なんですね。(略) [58] 人間関係のネットワークをすごく重視するのが母親です。父親は逆で，父親は道理に対してものすごくうるさいので，無理を通さないんですよ。(略)
D 女 性	[28]すごい古いタイプの日本人じゃないですかね～。 [30] 高校の時，父親に対しては，(略)本当に話しかけることもなくて，できるだけ距離をおきたい。口きかない。 [31](略)本当に母親にしか話してなかったです。(略)小さい頃から夫婦喧嘩とかを見てきていたので，で，うちの場合，夫婦喧嘩は一方的に父親が母親に怒る感じなんですよ。母親はそれを耐えてるって言うか。そういう感じをずっとよく見てきたので，父親はすごく怖い人って言うか。(略) [31] (母親に対してはどんな気持ち？)なんか味方っていうか。母親は，父親と違って親の威厳見たいのがあんまりない。姉の延長みたいな感じ。距離が近い。	I 女 性	[22] あんまり口をはさんだりしてこないで。 [23] (小さい頃から？)そうですね。あんまり親に何か言われたとかそういうこともなくて。 [24](自分としてはこれまで心配かけたとか，事件だったとかそういうことは？)あんまりわからないです。
		J 女 性	[41] 母親とは仲が良かったんですけど，父親とはあまり喋ることがなくて。ご飯とかは一緒に食べるんですけど，食べたあとは私も自分の部屋に入ってしまって。(略) [52] (性格的には？)父親は気難しい感じのタイプなんですけど，ちょっとしつけとかにもうるさい感じ。母親はあまりそういうことを気にしなくて，私達の好きにさせてくれる感じ。
E 女 性	[70] お母さんは仲がいいけど，お父さんとは話さない。中学生の頃から，全然。 [71] (略)父親が厳しいっていうか，成績がよければそれでいいみたいな人で。 [87] お母さんは友達みたい。一緒に買い物とかにも行くし。	K 女 性	[80] (略)すごく成績を気にしていたというか。(略) [81] (人柄とかは？)(略)真面目で，努力家っていうか。 [83] (お父さんは？)優しい面もあるんですけど，ちょっと考え方が極端なところがあったり，あとはだらしないっていうか，いい加減なところもあったりします。 [92] 母親は，やっぱうるさいなっていうか，もっとほっといてほしいって思ってました。(略) [93] (お父さん？)父とは話をしなかったので。同じ家には暮らしてたけど，あんまり口をきいたことがないんで。

4．考察

研究IIでは，高校在学中の性交経験者と未経験者では，当時の親子関係の認知がどのように異なるのかという点について，質的調査によって検討することを目的とした。研究IIの対象者は少なく，また研究Iと同様，大学生を対象としていることから，高校生全般の現状について一般化することは難しい。しかし，本研究の結果からは次のような可能性が考えられる。

まず，高校在学中の性交経験者と未経験者では，当時の親子関係の認知に明確な差は認められなかった。したがって，親子関係の質的な違いが，直接的に性交を経験することに影響を及ぼす可能性は低いと推察される。

ただし，男性の未経験者の場合には親が厳しかったと感じていることから，親の日常生活に対する管理的な態度が男性の行動を制約し，異性と過ごす自由な時間を持つことが困難となっている可能性もある。その背景には，親に対して適応的に振舞うことが必要であると感じていることや，親子間における思春期葛藤が解決されないために対人関係の発達的変化が起きにくい状況にあることなどが考えられる。

また，女性では性交経験の有無によって全く差が認められなかったが，性交経験者は経験後に母親に対して罪悪感を感じるようであった。こうした親に対する罪悪感が何故，母親のみに向けられるのか。また，何故，女性のみが感じるのか。さらに，どのような背景からこうした感情が生じるのかについては，本研究からのみでは明らかではない。性交経験自体に対してどのように考えていたのかという点も含め，性交経験に伴う様々な感情について，今後，明らかにしていく必要があろう。

総合的考察

研究Iと研究IIを通じて，以下のようなことが考えられる。

まず，高校在学中の性交経験の有無自体による親子関係の質的違いは，それほど大きくないと考えられる。また，親が期待する性行動に関する規範も，性交経験そのものによる差は認められなかった。ここから，性交を経験すること自体に対する親の養育の直接的影響は少ないと言えよう。ただし，親の養育を厳しくないと感じ，統制力が弱いと感じている場合は，性行動に関する親からの期待の認知や自身の規範意識を低下させると考えられる。またそれは，親の日常生活に対する管理的な態度が少なくなり，行動が自由になるために，性交経験に至りやすくなる可能性がある。そして，これらは，質的調査の結果を考え合わせると，性交経験後に変化した親子関係ではなく，性交経験前から築かれていた関係性であることが示唆される。

しかし，複数人と性交を繰り返すという状況については，単に性交を経験したという事実とは質的に異なるものとして考察する必要があろう。複数人との性交経験を行なうことについて，それ自体が逸脱的な性行動であると断定することはできない。とは言え，高校生活の間に複数人との性交経験を繰り返すことは，特定の対人関係を維持しにくい傾向があるとも考えられる。こうした複数人との性交経験者は，本研究でも特徴的な結果を示していた。すなわち，複数人との経験者は，母親における「情緒的支持」得点が低く，とりわけ女子は母親の「同一化」得点も低いという結果が得られた。このように，複数人と性交を経験した者は，親子間の情緒的交流が乏しいことが示唆された。

また，性交未経験者や，1人のみ経験者は，自らの性行動に関する規範に対して親からの影響を受ける可能性があるが，複数人との性交を経験した者は関連が認められなかった。これは親子間の親密さの欠如に関連があると考えられるが，質的調査によっては性交経験の人数にまで検討しなかったため，明らかとはならなかった。この点について，今後の検討が必要である。

今後の課題については，以上述べてきた点に加え，これらの結果が高校在学中に性交を経験した者にのみ認められるものなのかという点を明らかにすることが重要である。この点については，高校卒業後に経験した者との相違をも含めて検討すべきだろう。また，回想法による研究方法上の問題，対象者の問題を考慮して，高校生に対する調査との比較を行なうことも必要である。本研究では大学生に対する調査を行なった。高校生の時には感じていなくとも，親元を離れたり，心理的な発達を経ることによって，今になって当時の親子関係を支持的であったととらえるようになる可能性は高い。このような違いを明らかにするためにも，高校生に対する調査を行なう必要があろう。

引用文献

阪西通夫・斎藤憲康・川越慎之介・広井正彦　1987　山形市における女子高校生の性に関する実態調査　思春期学，5，550－555.

堀洋道・福富護・川上善郎・山本真理子・吉田富士雄・川田三夫・月村祥子・松井豊　1982　大都市高校生の性行動に関する研究(3)―環境・生活行動・心理変

数との関連―　日本教育心理学会第24回総会発表論文集，512－513.
五十嵐哲也・庄司一子　2003　高校時の性行動と友人関係との関連について　教育相談研究，41，59-67.
五十嵐哲也　2003　高校時性交経験者の友人に対する感情の特徴　日本カウンセリング学会第36回大会発表論文集，141.
石橋昭良・石川ユウ・月村祥子・里見有功　1997　デートクラブ等に出入りする少女の実態と性意識　犯罪心理学研究，35(2)，29－40.
磯網正子・藤生英行　1999　思春期・青年期の女子の性的逸脱行動に関する文献研究　教育相談研究，37，27-32.
Jeffrey, J. Arnett 1998 Risk behavior and family role transitions during the twenties. *Journal of Youth and Adolescence*, 27(3), 301-320,
小住綾・伊藤義徳・織田正美　2000　子どもからみた親の養育態度が中学生の潜在的不登校に及ぼす影響　ヒューマンサイエンスリサーチ，9，55-69.
宮本正一・牟田悦子・伊藤美奈子　2002　現代社会における学校臨床の現状と対応―最近の成果と実践にもとづき―　日本教育心理学会第44回総会発表論文集，S12-S13.
薙野ミエ子・上田公代・宮崎俊策　1991　高校生の性行動の調査報告―高校生が思う親の態度と性行動―　母性衛生，32(1)，124－128.
日本性教育協会(編)　2001　「若者の性」白書―第5回青少年の性行動全国調査報告　小学館
櫻庭隆浩・松井豊・福富護・成田健一・上瀬由美子・宇井美代子・菊島充子　2001　女子高校生における『援助交際』の背景要因　教育心理学研究，49，167-174.
Sullivan,H.S. 1954 *The psychiatric interview*. New York : W.W.Norton & Company, Inc. (中井久夫・松川周悟・秋山剛・宮崎隆吉・野口昌也・山口直彦(共訳)　1986　精神医学的面接　みすず書房)
戸田弘二・松井豊　1985　大学生の愛着構造と異性交際　心理学研究，56，288-291.
東京都幼稚園・小・中・高・心障性教育研究会　2002　児童・生徒の性―2002年調査　東京都幼・小・中・高・心障学級・養護学校の性意識・性行動に関する調査報告　学校図書
辻岡美延・山本吉廣　1976　親子関係診断尺度 EICA の作成―因子的真実性の原理による項目分析―　関西大学社会学部紀要，7(2)，1-14.
辻岡美延・山本吉廣　1978　親子関係の類型―親子関係診断尺度 EICA―　教育心理学研究，26，84-93.
卜部敬康・大木桃代・百瀬泉　1996　性行動に関する規範の研究　日本教育心理学会第38回総会発表論文集，309.
和田実・西田智男　1992　性に対する態度および性行動の規定因　社会心理学研究，7，54-68.

付記

本研究を行なうにあたり，筑波大学　庄司一子先生より御指導いただきました。記して感謝申し上げます。また，調査実施に御協力いただきました先生方ならびに大学生の皆様に心より御礼申し上げます。

なお，本研究は第14回 JASE 学術研究補助金制度の奨励金対象研究として行なわれた研究の一部である。

The qualitative differences in parent-child relationships between students who had sex and students who had not while they were in high school

Tetsuya Igarashi

The present study examined the qualitative differences in parent-child relationships between students who had sex and students who had not while they were in high school.

Retrospective questionnaires were completed by 401 university students. Moreover, 11university and graduate students participated in retrospective semi-structured interview. Main results were as follows: 1) Parents' attitudes for children had a little influence on students' sexual intercourse while in high school. However, parents' autonomous attitudes for children reduced parents' and students' sexual norms. 2) Students who had sex with several felt little mother's emotional supports and identification. These results suggested that they had poor emotional exchanges with parents. Furthermore, their sexual norms did not correlate with parents' norms. 3) Sexual norms of students who had sex with one person or had not correlated with parents' norms.